リトルバスターズ！~変わらない日常~

ハッピー23

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここでの日常は楽しいことばかりだ。恭介の突拍子もない言葉から始まり、”ミッションスタート!”という恭介の合図とともに、リトルバスターズの皆がその突拍子もなく言われた”ゲーム”に参加する。時に喧嘩なんかする事もあるけれど、最後には皆が仲良く笑っていられる。この笑顔があるからこそ僕は、きっとリトルバスターズが好きなんだと思う

目次

プロローグ ―――― 1
ゲームをしよう ―――― 3
ゲームをしよう ―――― 9

プロローグ

《校舎2階》

夜の校舎

『あ、あー……マイクテスマイクテス…』

……っ

『よし、リトルバスターズの諸君。ルールは先ほど言った通りだ。各自好きな場所に隠れているだろうーーー』

校内に聞き慣れた恭介の声が流れる

『いまより……っ『サバイバルゲーム～理樹を手にするのはだ～れだ！～』を開始する!!』

『『『『オォー!!』』』』

至る所からやる気に満ちた仲間達の声がする

なぜこんなことになったのだろうかと、とある教室の隅で頭を抱えている僕は

なんのメリットもないこのゲーム……。これは優勝を狙わないと、とんでもないこと

になることは確かだと確信している。もし、来ヶ谷さんが優勝した場合……
『もちろん優勝商品は『1日理樹を自由にできる券』だ！そして、俺も参加するのでよろしくっ』
っていうか、絶対僕をオモチャにするために優勝を狙ってくるだろう。
西園さんが優勝した場合も、ろくな事にならない、と思う。
「……」
なんとしても優勝しなくてはいけない。まだ恭介、真人、謙吾、鈴、そして小毬さんやクドならばそこまで……いや、恭介や真人と謙吾はダメかもしれない。もし、僕以外の人が勝つのなら、鈴と小毬さんとクドの誰かがいいな……そういえば葉留佳さんもいるが
ダメだ……何か悪巧みに加担してしまうことになりかねないっ
「そもそも……」
なんで、こんなことになったんだろう？
僕は暗い教室の中で今日の食堂でのことを思い返すことにした

ゲームをしよう

「あぁ……」

そういえば、思い返すも何もなかった……、と今更ながら気づく

『サバイバルゲームをしよう』

この一言だけで始まったものをどうこう考えても仕方ないじゃないか

僕は、空き教室でサバイバルの必須である武器を探しだす

確か恭介は、ルール説明でこう言っていた

ルール説明

・各人好きな配置に着き、合図があるまで行動をしないこと

・このサバイバルは腹と背に付けた”紙（的）”を狙うこと

この時にその紙が破れる、濡れるなどした場合、その者は敗者である

・紙（的）を狙う武器《アイテム》は、至るところに今日、全学年の生徒に協力してもらい配置してもらった。それを探しだして、それで戦うこと。言わなくてもいいだろうが、持ち込みは禁止する

・そして、このゲームの勝者には理樹の一日貸し出しを許可する
このゲーム……勝つため、負けないためには、まず、その武器《アイテム》を探しださなければいけない
「濡れる、か……」
何か水を利用できるようなものが隠されているのかな？確かに、水が染み込みやすそうな紙だ
僕は次々に机の中を確認し、掃除用具入れやバケツにも目を通す
その間に
『ゲッ……三枝！』
『ん～？おお、真人くんじゃありませんカ』
どうやらこの近くのようだ
『チッ、俺はまだ武器って言えるほどの武器なんて探し出せてねぇぞ』
『ほえ？な～んだ、じゃあお互い様だネ』
『ん？お前もまだ見つかってないのか？』
『始まって数分しか経ってないしねー』
どうやら、お互い手持ちはないらしくバトルはないみたいだ
『じゃあバトルはできねぇな』

『それじゃ、お互い見なかったってことにしましょーカ?』
とりあえず、会話を聞く限り何も起こりそうにないと思ったからなのか、僕は無意識に安心していた
『じゃあな』
『アデュー』
二人は別れたようだ
「早く見つけないと危ないか」
ササッと、机の中を確認していく
……そういえば、なんか足音が一つ止まったような気がする
『ふっふっふ、真人くん討ち取ったり~!!』
『へ……?』
廊下でドパンッと何かが破裂した音が響き渡った
「まさかの不意打ちか!?」
そうだ、忘れていた。こういうゲームでは、彼女が一番の要注意人物かもしれないということを……
『……』
なぜか沈黙が流れる

『……なに、それ？』
『……パイ…よ』
よく聞き取れない
『うなぎパイだよ！悪ぃか！アァ!!』
いきなりキレた!?
『うわ～っ、投げた水爆をうなぎパイでガードされた～！』
精神的ダメージを受けたような声がここまでハッキリと伝わる
うなぎパイって、そんな使い方できるんだ……
『ホントに誰だよ！毎回毎回うなぎパイを握らせやがってよォ！』
少し前の鈴とのバトルを思い出す。
三節棍　ｖｓ　うなぎパイ
「……」
ドンマイだよ真人
『ってか、ヒキョーだぞお前！』
『……はて？なんのコトデショーカ？』
棒読み……
『……いいぜ、やってやるよ。このうなぎパイでお前をコテンパンにしてやるっ』

『ムフフフフ、はるちんにはまだ水爆は残っているのだよ真人くん！』
カァン、とどこからかゴングがなった
一体どこからだ？
『いくぜっ！』
ウオォォと真人が唸る
正直、真人が不利だろう。しかも、どっちが勝ってもあまり嬉しくないという……
はぁ、と溜め息をつく
『……フム、どこにいくのか、是非とも教えてもらいたいな』
スパッと、今度は空気が斬れるような音がした
それにこの感じは……
『ぶっね……』
『ほう、よく受け止めたな』
『あ、姉御!?』
これは、とんでもないことになった
間違いなく来ヶ谷さんだ
『って、これってもう普通に武器じゃね!?』
『これは模造刀だよ。斬れはしない』

だけど痛いよね？
『なんか、よ。前も同じことなかったか？』
『そうだな。確か、あの時の君の武器は青ひげだった。前と比べれば、そのうなぎパイとやらは十分マシなのではないかな』
どこがだよっ！と、真人が言う
そうやって大声出したりしてるから来ヶ谷さんが来たんじゃないだろうか
「うーん、ここもそろそろ危ないかもしれないな」
少し危険な気がしたので教室のドアをこっそり開けて、真人たちから距離をおくように反対方向に移動する。
そして、階段付近
「わぁっ！」
何かに躓いた。
しかも、それは的をボロボロにされた……
「け、謙吾！」
謙吾だった
一体ここで何があったのだろうか……

ゲームをしよう

《校舎》

「だ、大丈夫なの謙吾!?」
　先程から倒れている謙吾に声をかける
「ふ……」
「ん？」
「不覚だ……」
　どうやら落ち込んでいただけらしい
「一体何があったの？」
「それが……わからないんだ」
「はあ？」
「そこの階段の下から気配を感じとり覗きこんだ瞬間……」

ゴクリッ

「……猫たちに襲われた」
「えっ……」
「しかも、的を集中的に引っ掻いてきたんだぞ。わけがわからない」

猫で連想できる人物はまず鈴だ
けど、前の肝試しの時の猫のまとまりのなさなどを考えると、猫を扱うのは少々難しい気がする

「結構気になるね……って、あれ？」
「どうした理樹？」
「いや、謙吾の背中に白っぽい粉がついてる」

指で摘まみ確認する

これは……

「これ、マタタビだ」
「マタタビだと？いつの間に……」
「マタタビが的に張り付いてたから猫たちに襲われたんだね」

おまけによく見てみると手の込んだトラップの残骸らしきものが転がっている

「きっとこの紐に引っ掛かるとマタタビが撒き散らされる仕組みだっだんだよ」
「はぁ……始まってこんなにも早くに敗退するとは……」
「しょうがないよ」
「……まあ、仕方ないか。俺は見物でもしてることにしよう。頑張るんだぞ理樹」
「ありがとう謙吾。それじゃあね」
手を降り謙吾と別れる

さてと、僕はどこにいこうか……

・４階に行く
・３階に行く

・この階に残る
・1階に行く

確かこの階には、真人、葉留佳さん、来ヶ谷さんの3人がいた……
つまり、他の階に行っても恭介にさえ出会わなかったらここよりは安全ということかな……？
pippipi……
「っ……!?な、なんだメールかぁ」
どうやらまた敗退者が出たらしい……
「え～っと、以下がリタイアした者だ……って、えぇ～!!」
ま、まさか
『来ヶ谷、真人』
葉留佳さんが勝ち残ったの!?
真人はまだしも来ヶ谷さんにまで勝つなんて……一体どうやったんだろ
ケータイに目を通していく
読み間違いではないらしい……
「ん？」

あれ？まだ続きがある

『そして、新たなゲーム参加者が増えたことを報告する』

これはマジで……？

えっ、あの人達が？どうして……

『二木、笹瀬川』

これこそ本当になにがあったの!?と叫びたいぐらいだ

二人はこのゲームの”賞品”のことを知ってるいるのだろうか？

『そして、新たに一人を勧誘中……以上だ』

……誰かいたっけ

「……でも、恭介は大丈夫ってことはわかった」

残りは僕、恭介、鈴、小毬さん、葉留佳さん、西園さん、クドに、追加メンバーの二木さん、笹瀬川さんか……

気のせいか

人数があまり減ってない気がする

「う～ん……どうしよう」

とりあえず移動したいんだけどな

僕の予想では1階には恭介、二木さん
2階（ここ）には葉留佳さん
3階、4階には他のメンバーがいると思う
いや、鈴はもしかしたらこの階か1階にいるかもしれない。西園さんは3階の空教室で本なんか読んでそうだ
クドは……結構怖がりだし、一番落ち着けそうな隅の方に隠れてそうだ

ここは誰かと手を組みたいところなんだけど
まだまだ考える一方だった……

《校舎1階ー恭介ｓｉｄｅ》

「おいおい、驚きだな」

「まさか、あんなところに罠があるとは思わねぇよ……」
「私としたことが、葉留佳くんにしてやられたよ」
逃げた先に、水を組んだバケツが落ちてくるようセットしておく
シンプルなトラップだが、いい考えだ
まさか、そんな単純な罠を仕掛けてるとは思わないだろう。
「で、恭介氏はどうするつもりかね？」
「俺か？俺はちとばかし用事ができたんでな……」
俺は仮面をつける
「……闇の執行部。『時風　瞬』として話をしにいこう」
まさか、そんなことあるはずがないと思ったのだが……
謙吾の引っ掛かったトラップはこのゲーム参加者が仕掛けたモノじゃあない
最初は三枝かと思ったが、どうやら違うみたいだ
じゃあ、来ヶ谷か？違う
他のメンバーもそんな罠を仕掛けるなんてできないだろう。できても、不意討ち程度だ
残るは……アイツしかいないんじゃないのか

消したはずの女生徒……
消えたはずの女生徒……

なぜだ？

「……わかってるだろ」

この世界に未練ができたんだろ

そうさ、別にそれでいい

俺もあれから思い出したさ……

俺はお前を知っている

「「……」」

二人が俺を見送る
俺は1階の非常口へと向かった

ああ、この世界は永遠と一学期をループしている
大して時間もたっていないような気もする

でも、懐かしい……

『ふん、また来たのか』

また会えるとは思ってもいなかった

『朱鷺戸　　沙耶……』

今度は銃撃戦何て事はしない……迎え入れるんだ

俺達の……皆の輪のなかに